



小田高 11 期通信

2010年6月1日発行
第5号

In the center of your heart and my heart, There is a wireless station; So long as it receives messages of beauty, Hope, cheer, courage and power From men and from the Infinite, So long are you young.

卒業 50 周年祝賀会の報告

編集者代表：
今道周雄

2009年10月31日に二宮神社報徳会館天空の間において小田原高等学校第11期生が卒業50周年を祝いました。同期生の総数は390名でしたが、亡くなられた方63名と連絡が取れなくなった方24名を除く303名の方に連絡を取った結果、83名の方々に出席して頂きました。

私達が卒業した1959年(昭和34年)は、まだ敗戦の名残が色濃く、砂川事件の裁判や安保阻止運動がある一方、新しい時代を感じさせるような皇太子成婚式や東京オリンピックの決定などがありました。以後私達は日本の高度成長に合わせ、苦勞や楽しみを共にしてきました。今から思うと右肩上がりの続く時代に生きた我々は、本当に恵まれていたのだと思います。現在小田原高校に在学中の若者達が50周年を祝う頃には、日本はどうなっているだろうかという思いが先立ちます。

当日の状況を手短にご紹介しておきます。祝賀会会場は丸テーブル10卓をならべ、ほぼ組み別に着席して頂きました。会の進行役は1組の清海さんと3組の辻さんがつとめ、乾杯、幹事挨拶、各クラス毎に自己紹介と和やかな雰囲気の内に進みましたが、話の尽きぬ方が多く最後に1組へ番が回った時には、会場明け渡しの時間が迫り、何もお話し頂けず残念でした。(前回45周年では1組から始めたので、今回は8組から始めました。)女子は6名の参加で、花を添えて頂きました。撮影係は8組の大藤さんをお願いし、数多くスナップを撮って頂きましたが、スペースの関係からここには全員写真だけを掲載します。

2006年の45周年の同期会から、あまり間を置かず開催する今回は出席者が減るのではないかと心配しましたが、前回に変わらぬ多くの方々にご参加頂き本当に有り難うございました。
常任幹事記

目次

- ・卒業50周年祝賀会の報告
今道周雄
- ・50周年
町田和代
- ・哀歎人生
-7景7詠
榮 憲道
- ・廣瀬さんの思い出
瀬川 強
- ・聴いてみませんか
<ラジオ深夜便>
月村 博



50周年

7組 町田和代

木々の若葉が目にしみる今日この頃、私の好きな桜の季節も終わり、「桜の追っかけ」をしている者として少しさみしくなりました。毎年桜の開花の便りを聞くと、「追っかけ」の虫がうずき出し、家にじっとしていられなくなり、さて、今年はどこへ花見にでかけようかと、会ったことのない桜の古木や畑の中の本桜に思いをよせ、あれこれさがし歩きまわっております。優雅で枝を広げた桜のほこらしげな姿を見ると、豪華な振り袖をまとったようで、「どう！ 素敵でしょ」と見せてくれているように感じるのがなんとも言えぬ快感なのです。又来年を期待して楽しみたいと思っております。

さて昨年は卒業五十年、それと私の仕事先の横濱高島屋も開店五十周年と時を同じくして記念すべき年でした。たまたま五十年前の開店時在籍していた者が現役の販売員として売り場にいるのが私だけだったので、神奈川新聞と読売新聞に取材を受けることになりました。卒業後、横濱高島屋に職員として就職し、呉服部に配属されたお陰で、結婚、出産、退職し、再び職を得ても、特殊性のある職場である同じ場所で続ける事ができたのだと幸せに思っております。自分がこんなに永く働けるなんて思ってもみませんでした。今はライフワークとしてこの仕事は私にとって欠かせない大切なものとなっております。

今年も四月より、私のライフワークの七五三のお祝いの販売が始まりました。毎日孫のような可愛いお客様を相手に、元気エキスを沢山頂きながら働かせて頂いております。



50周年祝賀会席上にて

現在の百貨店の置かれている状況はきびしく、少しずつ好転しているとはいえ楽観は許されません。私自身がお客様目線に立ち、満足して頂けるような細やかな「おもてなし」ができるよう常に心がけて売場に立つようにして居ります。

又近いうちに、皆様にお目にかかるのを楽しみに筆筆でございましたが近況を筆にとらせて頂きました。

哀歓人生一七景七詠

6組 榮 憲道 sarara@hm8.aitai.ne.jp

故郷慕情

- ・ 渺茫たる相模の海を見晴るかす
八幡山上母校は立てり
- ・ 啄木が歌の沁み入る歳なりき
故郷のこと遠く偲べば
- ・ 若鮎の銀鱗躍る酒匂川畔
さかわがわ
松涛の調べ天空に満つ
- ・ もぎたての梨は届けり故郷の
白き花咲く野道浮び来
- ・ また一人旧友の逝く知らせあり
古希間近なる秋冷の午後
- ・ 箱根路を若者の夢かけあがる
新春駅伝テレビに釘付け
- ・ 故郷の友より嬉しきメール便
キー打つ指先今宵弾みぬ

《一口メモ》

【故郷】を遠く離れた人間にとって、【故郷】は懐かしく、優しく、愛おしく、正に“母”のような存在といえるでしょう。特に西湘の地・小田原は気候温暖、風光明媚、人情厚く、「遠くにありて想うもの」ではなく、「近くにありて住もうもの」かも知れません。

甲子園の風

- ・ 「栄冠は君に輝く」歌聴けば
思いは巡る甲子園の日々
- ・ 十年余子ら育みし吾が家は
甲子園球場指呼の間にあり
- ・ ファンファーレは大鉄傘にこだまする
甲子園の夏開幕の刻
- ・ 熱戦に揺れるスタンド夏盛り

- ・ 炎天のアルプス壇上若人は
校旗支えて小揺るぎもせず
- ・ 高らかに校歌響きし夏空ゆ
六甲山上雲は湧き立つ
- ・ 故郷のなまり飛び交う土産店
今年人気のペナントを買う

《一口メモ》

大阪に転勤したのは昭和48年（1973）秋、10年ほどを西宮の社宅で過ごしました。そこから甲子園球場は正に指呼の間、東海大相模の原辰徳（現・巨人監督）から清原・桑田のPLコンビの活躍までを見守っていました。今も数々の熱球譜が頭をよぎります。

阪神大震災の記憶

- ・ 六千余の尊命逝きし大震災
惨たる月日忘ることなし
- ・ 崩れ落つ橋脚の列すりぬけて
すし詰めバス救援急ぐ
- ・ 激震にビルはひしゃげて天に哭く
三宮の街瓦礫と果てて
- ・ 灰塵の長田の街のそこかしこ
焼香の煙たなびくを見る
- ・ 深沈と雪降りつる夕べかな
慟哭の街浄めるがごと
- ・ 谷あいの仮設住宅荷を抱え
バス降る人の暮らしを思う
- ・ 彼の日より15年経し街並は
復興成りて春陽に輝く

《一口メモ》

1995年1月17日5時46分——当時、私はまた大阪に戻り単身赴任しておりましたが、たまたま連休明けのため、その日の朝は名古屋の自宅に居りました。神戸を中心に阪神間には取引先も多く、頻りに被災地に出向きましたが、あの悲愁の日々は忘れようにも忘れられません。

闘病の詩

- ・ わかれ
密やかに別離のノート書き止めぬ
手術前夜のほの暗き部屋
- ・ ストレッチャーに身体を委ね手術室へ
無事に還るを心に誓い
- ・ 朦朧と消えゆく意識その先に

- ・ ゆるゆるとスープ啜りて合掌す
術後の食事ただありがたく
- ・ 「頑張っナースて！」看護師の笑顔を糧として
廊下周回りハビリの刻
- ・ 昨日一つ今日は一つと減る管の
跡を撫ぜ撫ぜさする喜び
- ・ 病室の窓は日毎に輝きて
待ち焦がれたる退院の朝

《一口メモ》

62歳で定年退職した翌年、がんを宣告され、名古屋大病院で胃の半分を切除されました。幸いにして早期の発見。その後、抗がん剤のお世話になることもなく、6年が過ぎております。皆さん、定期診断は大事ですよ！

初恋の丘

- ・ 初恋は叶わぬものと知りながら
愛の残影いまだ追ひゆく
- ・ 老いし今ひとり辿りぬ思い出の
〈伊豆の瞳〉と呼ばるる湖辺
- ・ そろそろとか細きからだ抱き寄せし
木洩れ陽の丘若葉きらめく
- ・ おさなごい
こわごとと唇触れし幼恋
かの日偲べばうたた春愁
- ・ くちづけの甘き香りを残し置き
君はいずこの人に嫁ぎぬ
- ・ 老いくればなお鮮やかに甦る
あの日あの時君がまなざし
- ・ 夢宿す一碧湖畔緑なる
あの日と同じボート漕ぎ出づ

《一口メモ》

私の“初恋の人”は小学校の同級生。高校三年春から10年もの長い交際でしたが、結局実りませんでした。その後、出会ってわずか9ヶ月で結ばれた最愛の“女房殿”とは今年で丁度40年目のルビー婚、人生って不思議なものですね～。

テニスは楽し

- ・ 身構えしラケットの先トンボ飛ぶ
テニスコートは里山のなか
- ・ トスの手をしばし休めて仰ぐ空
浮雲ひとつ北へ流れる
- ・ 緩急にひねくれボールを右左
老いのテニスは頭と技で
- ・ 軽快なフットワークもしばしの間

スタミナ続かず氣息奄々

- あと一步ボールわずかに及ばざる
古希近き身の衰えを知る
- 「ナイスショット！」狙いすましたスマッシュに
ラリーの応酬ようやくに止む
- 勝ち負けのこだわりもなし歳古れば
ただ汗流すだけの喜び

《一口メモ》

テニスは中学時代から親しんだスポーツで、今でも毎土曜、老骨を鞭打って汗を流しております。しかし、高校のときは、体力の限界を悟るとともに受験勉強を優先、伝統ある小田高ソフトテニス部を一年途中で離脱、僚友に大変迷惑をかけてしまい、今でも懺悔の気持ちで一杯です。

長久手春秋

- 里山の連なる町や罫雲
風はさやかに秋を運び来
- コスモスの丘一面に広がりて
笑顔弾ける秋は真盛り
- 芒立つ長久手の里その先に
初冠雪の御岳光る
- 紅葉狩り香嵐溪の帰り路か
グリーンロード光芒の列
- 菜の花に蝶舞う丘や万博の
夢を紡ぎしリニアカー行く
- 夢追いしつわものが跡そこかしこ
長久手の里花吹雪舞う
- 揺れる身を支うるがごと寄り添いて
花舞う道や老夫婦行く

《一口メモ》

長久手町は、古くは小牧・長久手の戦い、近くは愛知万博の開催地として有名です。名古屋市東部に接し、豊田市・瀬戸市・尾張旭市などに囲まれた緑豊かで住みやすい町。昨秋から娘一家と同居生活をスタート、それなりの苦勞もありますが、“健康長寿”をモットーに、愛妻と相携えて、林住期から遊行期を過ごしてゆきたい

廣瀬さんの思い出

西和賀文化遺産伝承協会理事 瀬川 強

(編者注： 4組の廣瀬龍一君が昨年亡くなり、追悼文を書くことを計画していましたが、生前廣瀬君が力を入れていた岩手県西和賀のNPO 法人理事で、最も親しかった

廣瀬龍一さんが9月15日、68歳の若さで永眠しました。

廣瀬さんとの出会いは、廣瀬さんが沢内に来始めた1993年頃で、ガス欠で夕方我が家を訪ねてからです。子どもがまだ2歳と3歳の頃のちょうど夕食時で、さあこれから食べるぞ〜というときにタイミングよく？訪ねてきました。廣瀬さんは少し遠慮していましたが、4人分の小さい鍋を5人で慎ましく食べたのを覚えています。そのとき、大手清水建設をやめて沢内村に来る決心をしたことや、カタクリの会の活動にも関心を寄せられ、翌年の1月から主催する自然観察会に積極的に参加するようになりました。

廣瀬さんはグリーンツーリズムに強い関心を持ち、グリーンファーム長瀬野という機関誌を発行していました。たまたま廣瀬さん宅を訪ねたときに『川舟の家』が取り壊されることを知りました。『川舟の家』は私が西和賀に来るようになってからいつも気になり、時々写真を撮っていたところでした。そこがなくなると聞いて黙っていられず、廣瀬さんと『川舟の家』保存に向けて話し合いました。そんなおり、1998年に日本自然保護協会の自然観察指導員講習会が沢内バーデンで開催され、廣瀬さんが受講されました。そのとき、『川舟の家』の話が出て寄付を集めて雨漏りを直そうとの話になり、廣瀬さんが中心になって呼びかけ、多くの寄付が集まり雨漏りは修復されました。その後現在のNPO 法人西和賀文化遺産伝承協会を立ち上げ、北上管内では第一号に認証されました。認証後、テレビや映画ロケ地にも利用されてきましたが、すべてが廣瀬さんの尽力によるものです。

奥羽自然観察会には1994年の1月から参加し、2007年6月198回笹峠が最後の参加となりました。トータルで74回参加され、2004年には皆勤賞を差し上げています。いつも熱心に私のそばにいてメモをしていましたが、動植物の名前はまるで覚えてはいませんでした。私も廣瀬さんも西和賀に魅力を感じてよそから来て住み着いた訳ですが、廣瀬さんは西和賀の自然と文化を大切に、世界に向けて発信しようという熱い気持ちを抱いていました。

私に対してはいつも信頼を置いていただき、私の考えをいつも積極的に素早く具現化してくれる人でした。そんな廣瀬さんが逝ってしまうなんて未だに信じられません。「瀬川さん」と今にも訪ねてきそうです。今年、南部森林管理署との契約により、沢内大木原の国有林を5年間借りることになりましたが、エッセイストの沢口たまみさんの命名により『星め

ぐりの森』と名付けました。星は多くの命の意味で、命が永遠に巡る森です。広瀬さんがなくなった後『星めぐりの森』で森作りを行いました。その一つに「広瀬の森」と名付けました。広瀬さんの純粋な意志が永遠に続き、今後も私たちの心に力を与えてくれるように願っています。

聴いてみませんか<ラジオ深夜便>

6組 月村 博

tsukimurahiro@yahoo.co.jp

1. 番組の誕生

かつてのNHKのラジオ放送は、災害時や、オリンピック中継などを除き、午前5時に放送を開始し、午前0時に放送を終了していました。

ところが、1988年9月に昭和天皇が重体になって以降、天皇の容態を深夜も含め随時速報することになり、総合テレビ、ラジオ第一、FM放送を24時間放送にし、定時放送終了後から翌日の放送開始時間までフィラーとしてクラシック音楽と関連ニュースを放送していました。

この「静かな音楽を終夜流す」という放送形態が好評を得て、昭和天皇崩御の1989年1月7日以後も、“常時24時間放送できないか”という投書が数多くよせられました。

1989年11月の3連休に「67時間ラジオいきいきラリー」と題した特別放送を実施し、普段メンテナンスに当てる深夜時間帯に音楽や落語などを放送し、リスナーの反響を得ました。民間放送の「オールナイトニッポン」などの若者向けの深夜ラジオ番組に不満だった中高年層から「大人が聴ける静かな番組」として支持され<ラジオ深夜便>の放送につながりました。

1990年4月からは不定期放送で<特集ラジオ深夜便>と銘打って午前0時から放送を開始し、1992年4月より午後11時台からの定時放送に移行し、24時間放送がスタートしました。現在では深夜時間帯のラジオ聴取率で民放ラジオ全体の聴取率を大きく上回る人気があり、専ら若者や長距離トラック運転手向けに製作されていました深夜番組編成の再構築など、他民放局へ影響を与える存在になっています。(NHKホームページより)

2. アンカーとリスナー

<ラジオ深夜便>は、幅広い層のリスナーに支持されている深夜の人気番組で、NHKのベテランアナウンサーら14名が“アンカー”を担当し、朗読、健康、旅ガイド、民話、歌など盛りたくさんの内容となっています。

この番組とリスナーをつなぐのは、なんと言っても“アンカー”であります。アンカー(ANCHOR)は英語で「(船の)いかり」の意味のほか、「どっしりと安定した頼りの綱」とか「リレーの最終走者」の意味があります。ここから、放送や新聞などでは「最後のまとめ役」を“アンカー”と呼んでいます。

<ラジオ深夜便>では、放送開始当初から“アンカー”を使っています。アンカーは、基本的にはNHKのベテランアナウンサーや退職したOB・OGが担当しています。お馴染みのアンカーとしては、



NPO法人
西和賀文化遺産伝承協会 機関誌
第49号 (2010年2月)



弔意文が掲載された西和賀文化遺産伝承協会の機関誌

「西和賀の自然と文化」第49号には5人の方々が心のこもった弔意文をお寄せになりました。誌面の都合から瀬川さんの文のみを掲載させて頂きましたが、私達の友人が西和賀に一人移り住み、地元の方々と深く交流していたことを改めて知りました。第二の人生をこれほど熱く生きられた廣瀬君を羨ましく思います。最後の3年間を難病と闘い、ご家族ともども大変苦労され、まだ思いは残ったことでしょうか立派な一生であったと思います。ご冥福を祈ります。(編者)

12年間<NHKのど自慢>の司会を担当しました宮川泰夫アナやこの3月まで同じく司会を担当していました徳田章アナが4月から担当することになっています。この3月、<ラジオ深夜便>は放送開始20年を迎え、3月20・21日にNHKホールで「放送開始20年！ラジオ深夜便スペシャル」を開催し、アンカーとリスナーが一堂に会しました。私もリスナーの一人として参加しましたが、2日目の21日(日)は明け方の暴風雨で交通機関がかなり乱れたにもかかわらず約3,000人が集まりました。

いま全国に<深夜便>のリスナーが200万人いるといわれ、5年前の15周年記念の集いは1日だけでしたが、今回は2日間開催し、抽選で入場者を決定したようです。

リスナーの年代は、70代が中心で60代と80代でほぼ構成されていますので、これから団塊の世代が急激に仲間入りしてくるものと予想されています。

3. 番組の印象

さて、私と<ラジオ深夜便>との出会いは、2005年に1か月ほどの入院生活の中で耳にしたのがこの番組でした。夜の消灯が早く、朝方3時過ぎに目が覚めると、6月の頃でしたから外は既に白々としており、もう一寝入りというわけにはいきませんでした。テレビを点けるのは同室の方に申し訳なく、ラジオのダイヤルを合わせたところ、AM放送は室内のため電波が弱く、FM放送ならなんとか聴くことができましたわけです。

丁度この時間帯は「にっぽんの歌こころの歌」のコーナーで、懐かしい歌声とゆったりしたアンカーのトークに引き込まれてしまい、そのままエンディングまでイヤホーンをはずすことができませんでした。その後、退院してからは、番組の最初から聴くことにしましたが、そのまま寝入ってしまうことが多く、今では聴きたいコーナーを予めセットし録音しております。

いままで聴いた<深夜便>で特に印象に残っているコーナーを二つ挙げるとすれば、①「朗読『蝉しぐれ』」と②「サタデートーク～輝け！熟年『人生の収穫期を楽しむ』」です。

①は数多い藤沢周平作品のなかでも人気が高く、傑作とされる作品を松平定知アナ(テレビの「その時・歴史が動いた」担当)の朗読で放送したものです。これは当代きっての“藤沢周平読み”である松平アナが、毎週1回、15分ほどの朗読で、18か月に亘る長丁場のコーナーでした。9か月に及んだ録音は語句や人名の読み方、アクセントの綿密なチェックから、せりふの読み方や“間”などの演出面まで、ディレクターと事細かに詰めながら進められたそうです。朗読の真髄は『作者が何を書いているかを理解するだけでなく、その“何”を“どう”書いているかにまで思いを致して、聴き手がそのことを理解できるように、“そう”読まねばならない』と師匠から指導を受けた松平アナは「ナレーションとは違って、原作には手を入

れることはできません。原作はいわば、クラシック音楽の楽譜。朗読は“演奏”なんですね。カットなしの全文朗読で、一語一語、魂を込めて読んだつもりです。」と語っています。藤沢周平は、彼にとっての“偉い人”として、自分の仕事ひと筋に何十年も働いてきた農民や職人を例に挙げている。

「誠実こそが大事、真剣に生きることこそが大事、人間としての品性こそが大事」……。

私は、このコーナーは途中から聴きましたが、“海坂藩”の風景を想像しながらテレビや映画とはひと味ちがう感動を覚えました。以前、ラジオ日本の早朝番組で、徳川夢声氏の朗読「宮本武蔵」を毎朝聴いたことがありますが、改めて“朗読”の素晴らしさを感じた次第です。

②は作家の桐島洋子氏(1937年生)がご自分の体験を通して、“人生の後半を如何に過ごしたら良いか”を熟年世代へのメッセージとして語ったものです。

桐島氏が50歳の時に、下の子供さんがアメリカに留学し、うちから子供が一人もいなくなったのを記念して「親子生活卒業大旅行」という、2か月がかりの思いっきり贅沢な世界一周の旅行をした時に、「四住期」という言葉を知ったそうです。

インドで出会った、ちょうど桐島氏と同世代のインド人のご夫婦の山荘に招待され、お茶をいただきながら、「実は我々は林住期で……」というお話をうかがい「あ、そうか、私もその林住期だ」と思ったそうです。

「四住期」は古代インドの思想で、人生を春夏秋冬の四つの季節に分けて、それぞれの季節にふさわしい住まいがあるというものです。

人生の春、つまり青年時代は「学生期」で、勉強したり修行したりする季節です。次の壮年期は「家住期」で、仕事に励んだり、家庭を築いたり、子供を育てたりする、いちばん忙しい働き盛りの時期であり、汗みずくの夏ということです。そうやって一生懸命働いて、そういう社会的な、家庭的な務めが一段落したところでやっと汗が引き、涼しい風が吹いてきて、秋の「林住期」に歩みいるわけです。

一息ついて、あらためて自分の人生に向き直って、生きることを意味をしみじみと考えたり、自然に心を解き放ったり、現実を楽しんだりします。そして、よく熟れた人生の果実を存分に味わい尽くすと、心残りなく淡々と枯れ尽くして冬を迎えられるというわけです。その冬が「遊行期」です。遊行というのは巡礼という意味で、例えば四国のお遍路さんなどが典型的な遊行の姿です。

これは祈りや瞑想で煩惱を洗い流し、自分を透明にして、すがすがしくあの世に旅立つための準備期間です。これは人生の最後の数年間で良しとし、その前の「林住期」をゆっくりと過ごすのが、人生としていちばん得な生き方ではないかと桐島氏は語っています。

「林住期」(第三ステージ)を有意義に生きるために、

ここで「三つのR」を考えるように桐島氏はアドバイスしています。一つはリアライゼーション、「気づき」です。つまり、いろいろなことに気づき始めるわけです。スピリチュアル(精神的)な気づきもありますし、環境に配慮した、エコロジー的な生き方に対する気づきもあるし、いろいろな気づきがあります。それから、リラクゼーションの「くつろぎ」です。このくつろぎは、「林住期」をよく生きるためにいちばん大事なことです。力を抜くということ、日本人は、リラックスしましょう、力を抜きましょうといっても、なかなかできないのです。

最後がリレーションで、「つながり」です。「家住期」のように、自分のためになるとか、何かの役に立つとか、そういうことで人を選ぶのではなく、魂が響き合うとか、そういう感じの人たちと付き合うようにして“終の住みか”ならぬ“終の人間関係”みたいなものが形成されるようにしたい。

今年、11期の仲間は、古希を迎えるわけですが、70代からが人生の黄金期ともいわれ、一日一日がますます貴重に思えてきます。

そこで、各界の第一人者と呼ばれる人たちの素晴らしい話を聴くことができる<ラジオ深夜便>「明日へのことば」のコーナーにダイヤルを合わせ、エキスを吸収し、活用していただきたいと思います。

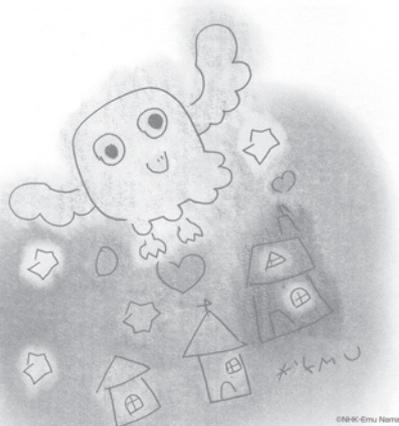
何やらNHKのPRみたいになってしまいましたが、朝方、時間が空いていましたら聴いてみてください。

(完)

放送開始20年!

ラジオ深夜便

スペシャル



平成22年 11月 3月20日(土)
開場/午後1時
開演/午後2時(午後5時終演予定)

平成22年 11月 3月21日(日)
開場/午後1時
開演/午後2時(午後5時終演予定)

会場 NHKホール



(編集後記)

「小田高11期通信」第5号は4月1日に発行するつもりでしたが、2ヶ月近い遅れとなりました。時間に縛られる必要は無いのですが、目標がないと進まないの次発行目標を設定しました。

<第6号原稿募集>

次号から<短信欄>を設けます。近況、感想、思い出、交流など100-800字程度の原稿をお送り下さい。

原稿はWordあるいは手書きをお願いします。Wordはメール添付で、手書きの場合は郵送またはFaxで下記までお願いします。

第6号の発行は12月1日とします。是非皆様の原稿をお寄せ下さい。

手書き原稿送り先:

〒250-0001 小田原市扇町5-14-12-245
今道周雄

電子原稿送り先: cimamich@juno.dti.ne.jp

Fax 原稿送り先: 0465-35-0513

原稿締め切り日: 2010年11月15日

ダウンロードサイト URL

<http://www.juno.dti.ne.jp/~cimamich/Odako/DL11.html>